

World English 談義

寮 金 吉

§ 1 中学校や高等学校ではどんな英語を教えたらよいのか。つまり形式ばって言えば、日本現行の高等普通教育で一概に英語と言うけれど、英語にもいろいろあって、漢文——それは Chinese classics ではなくて、日本語文学の一 genre であって、日本文化の一要素である。——が固定しているのと違って、英語は生きている language で、language のつねである changes と dialects にみちている。教育法規でどんな英語を具体的に指しているのか、学生も教師も共に反省してみる必要がある。つまり日本現行の高等普通教育の中の英語という科目はどんな英語を指しているのか。

§ 2 English language にも、時代的に見て O. E., M. E., と Mdn. E. と種類別ができる。専門学徒なれば、O. E. とか M. E. も一応考えられるが、普通教育としては、Mdn. E. に限ってよい。しかも1650年以降の Late Mdn. E. が主である。しかも、Present-day E. とふつうよばれるものが主となる。文学的に優れているからとて、Shakespeare, Milton を普通教育にもち出す愚はしないだろう。

§ 3 英語の学習を大別すると、practical study と scientific study になる。practical study は natives のように話したり、書いたりする、修練が主となる、technics を習得する、つまり art の面と米英の文化地理的な背景、realia を理解する cultural aspect が考えられるが、これは副次的である。scientific study とここでよぶ研究は、linguistics から English language を研究することを意味する。これは日本でふつう英語学、English linguistics とよぶものを指すのであろう。しかし、この二方面の研究は全く別なものでなく、相補うと考えてよい。

日本の高等普通教育での英語学習は practical study が主であって、scientific study は従であって、教授者としては basic knowledge となるであろう。

King's English とか、Queen's English の conception は Standard English のそれと同じであるが、standard English とは London を中心とする、Southern English で、教育のある中産階級の formal な spoken, ならびに Written English を指すと理解する。

§ 4 language が具体的に存在する、あり方は dialects のほかにはない。language を具体的に見ようとすれば、dialects を考えるほかにはない。dialect を考えるには、speech community の概念が必要になってくる。speech community から見れば、language は dialect として存在する以外には、存在しようがない。標準日本語とても、首都東京地方の dialect が幾分 modify されたものである。中京地方の dialect を使うからといって、inferiority を感

ずるのは、教育が正しくないためだ。

dialect をわれわれは不用意に、“A corrupt form of a language spoken in a given region by people who don't know any better.” と簡単に考え易いが、speech community からみれば、この見方は誤りで、むしろ自然のあり方である。同じように Standard French は Paris dialect であり、Standard English は London 地方の dialect である。dialect が literary language になるにつれ、いわゆる received standard になる。

各家庭にもその家庭特有の quirk があり、個人にもその個人特有の pattern があって、いわゆる idiolect が成立つ。かくして人はほとんど無意識のうちに、class, age occupational の speech community を通りすぎてゆく。

language のより本質的性格は、parole すなわち speech であって、文字は補助的手段にすぎぬ。われわれが国語を学習したり、研究するとき、ふつう文字による国文を学習するのが習慣になっているので、language の研究と言えば、すぐ written language を連想するが、language の性質を見極めると、その本格的なものは spoken language、つまり speech であって、文字は speech を固定化する一 device である。letter は Sign, Symbol にすぎないが、speech が letter で表示されるほかないと考えると、文字で表示された国文学の研究はその意味で間接的に language の研究になる。このような symbol 作用を忘れてはならぬ。

§ 5 人間の生活する所、speech community が考えられる。家庭にも dialect が考えられ、個人にも Idiolect がある筈である。いわゆる stylistic は writer, author の style 上の personal trait を指摘して、その writer の personality をもとめようとする。かく speech communities をみて行くと、language とは dialects の group と定義できる。language とはばくぜんと人間の頭に存在するものでなく、speech communities を作る人と人との間に intercommunicate される具体的な dialect として存在する。

現在東京弁は日本の首都東京地方の dialect が modify され、一般人に receive され H. C. Wyld の Received Standard である。やがて literary language になり、Standard Japanese となったのはむしろ language そのものによるよりは、metalinguistic な文化、政治、経済が原因になっている。

§ 6 もちろん Britain にも language のこのような現象がある。dialect 以外に language の存在しようがないとすれば、一概に English と云つても、日本人として学習するに、どんな dialect を学習したらよいのか。前にもふれたように、ここで Standard English とは如何なる dialect を指しているのか。Modern English の中 present-day English とは Britain の首都 London を中心とする、いわゆる Southern English となる。Southern English が literary English になっていて、ふつう Britain の文学作品の大部分である。特殊な dialect, slang を故意に使つてもものされた novels もあるが、また Early modern English として区

別すべきである works もあるが、English がどんな時代に属しているか、どんな dialect が使われているか、その実体を心得て学習、研究すべきである。その実体に無関心であるような学徒はこの頃ないと思うが、そうした注意が払われていないような珍風景がないでもない。

§ 7 American English を植民地的な—colloquialism と考える者は今日では少いだろう。American variants という表現はどこかに本物があるとの観念が premise にほとんど無意識裡になっている。つまり British English がほんものだと先入主が日本には広らまっている。

American English を史的に考えると、英国の植民地 dialect から出発しているが、これを現在一dialect と見るには、あまりにも America の文化、経済、政治が大きすぎる。linguistics から見ても、また外国人の教授学習の立場から見ても、British English と American English とは同等である。むしろ地理的に言っても、diplomacy から見ても、trades, politics から見ても、日本人にとっては、この二語はどちらが重要か、一般通念を変える必要がある。イギリスの音声学者 Daniel Jones (1881—) の *An English Pronouncing Dictionary*. と *An Outline of English Phonetics*. の二著が日本の英語学習に及ぼした功績は測りしれないものがあるが、それを金科玉条のように思ったとすれば、Jones 自身上記の発音を標準とし推奨したのではないことを思えば、日本人の受取り方に誤りがなかったかどうか反省する必要はありはしないか。

period を [pí(:)ríəd] と発音すれば、「それは旧式で、[píəriəd] と発音せねばならぬ。」と新式ぶる教師はいまどきないであろう。

basket は [bæskit] はまずくて、[bárskit] とやるように助言する教師は不注意である。

§ 8 American English にしても、dialects があるので、どの type を標準にして学習したらよいのか。America 人なら、誰でも標準 type を教えてくれるとの hasty conclusion は、舶来品を無条件に受け入れる愚と似ている。ふつう American English を三つに大別している。そのうち America 全土の $\frac{4}{5}$ をしめ、全人口の約 $\frac{3}{5}$ にわたる Western type が一般に general type として認められている。この general type を学習上 standard とすべきである。

American English は学問的には Henry Louis Mencken (1880—) の *The American Language*. の四版 (1936) とその supplement, 1945、1948の二部が authoritative になっている。Mencken は *American Language* とよんでいるが、また辞書としては、Sir William Craigie と James R. Hulbert の編になる *A Dictionary of American English on Historical Principles* (1938—44) などがある。Quarterly として、Columbia University Press から1890年以来出されている *American Speech* は Americanism を知るには参考になる。アメリカ語法 (Americanism) とは Scotticism にならって、1781年に Princeton University の Witherspoon が始めた語である。

§ 8 American English の著るしい特長は Spelling, Pronunciation, Vocabulary で、Syntax ではほとんど原則的に British English と変りないが、colloquialism には注意すべきものがある。literary language としては Washington Irving, Edgar Allan Poe, Nathaniel Hawthorne など当時の Standard English を書いた。Henry James, Logan Pearsall Smith, T. S. Eliot は America で生まれたが、Europe にあこがれて、intellectually に心のふるさとを新世界にはもとめなかったが、Standard English とみわけの出来ぬほどの English を書いた。また American Critic の Edmund Wilson, Elmer Edgar Stoll, George Sherburn, Douglas Bush 等の English は George Saintsbury, Andrew C. Bradley, Oliver Elton, Sir Herbert Grierson 等の English とはほとんど区別できぬ。こういう点 English literature といっても Cosmopolitan 的になって、英米と区別するのは、language の上からは、ほとんど無意味になっているようだ。政治的な、地理的境界とは関係なく、English language で書かれた、memorable な excellent writings ということとになろう。

最近の Webster の New International Dictionary の三版は spelling にしても、pronunciation にしても、vocabulary の definition にしても authoritative として一般に受け入れられている。

§ 9 1942年に合衆国 War Department は Europe に服役している America 人に、*A Short Guide to Great Britain* を出版して、America と England の vocabulary の variants を表示した。H. W. Horwill は *A Dictionary of modern American Usage* (1935) と *An Anglo-American Interpreter* (1939) を出して、British English と American English の Variants を示したが、English children の唇から時々人は fashionable American locution をきくそうである。

再び British English と American English とはあらゆる角度から見て対等である。かって、nurse の発音をある American officer に直させたことがあった。Jones 一本やりで育った日本の英学生が [nɜ:s] とやると、その America 氏は [nærs] と訂正した。それをかたわらできいていた素人の日本人は「あいつの英語は駄目だな。」と判断する。この現象は実に噴飯もので、その America 氏もそれを批評した日本人もともに phonetically untrained gentlemen で、英米 pronunciation の基本的差異を全く知らなかった ignorance によるのだ。どんな America 人でも発音にかけては Superior であると思入む所に humor がある。日本にきている軍人、軍属の America 人には、phonetically trained されている者は案外少いものだ。また日本人にしても、Jones 一本やりで、IPA が relative に correct であることを absolute のように信じているとすれば、反省を要する。

British English ではこう、American English ではこう発音する位のゆとりはもちたいものだ。British English と American English をごったませに発音するような不見識な教授

者はいないだろう。どちらかに統一するとすれば、American English による方がいろいろの点から見て preferable ではなかろうか。

§10 二十世紀の English language は急速に発展している米英の民衆的な、産業的な社会の needs に適うよう、変化の新しい段階に入った。それは必然的に18世紀の静的な ideal を打ちきること、徐々に動的時代の要求に adapt するようになった。とは言え、18世紀までのすべての tradition つまり歴史的連続性をかなぐりすてることではない。English language の重なる patterns は今尚 確固として続いている。これまで usage でよいと分った語句、新しく加えられたもののうち、よいと分った語句は続いている。Restoration 時代の文章家達が Sir Thomas Browne の Style が絢爛としているが、Latin 語流の錦織りにあきたらず、それを排除して、Defoe, Dryden の平明な English の衣をきたように、現代の作家達は自分特有の文体を創り出そうと努力している。

§11 今日の English prose は、(こんな複雑なものを大胆に generalization すれば)形式ばらないで、急速で、実際的と言えよう。convention とか、装飾的 taste とか、structural な complexity の重荷を投捨てて軽快になっている。最悪な場合には、style は落付きがなく、野卑で平板に見え、無味である。最善の場合には、鋭さがあり、強じんで明快で、直接的である。

style の世界にも、他の場合と同じく、いわゆる mass-production が流行し、きめのこまかさを欠き、荒々しくなり、artisan 気質が衰えていくように見える。mass-production は art を軽蔑する。かってよりも安価な、非芸術的な、鈍感な、卑俗な language の使用がはやっている。これでは芸術性は軽視されて、多分に dehumanize されて死ぬ。しかし、language の energy はいつも働いていて、真に vital なものは生き残ってゆく。実に English language は変化しつつあるし、尚も将来変化するであろうが、しかし、衰乏の危険にさらされているとは思われない。

English language は過去三世紀にわたって世界中に広ろまってきた。そして実質的に international auxiliary language として進みつつある。中世紀には普遍的な学問用語として Latin 語が広く行なわれていた。イギリス中小学校のことを grammar school とよんでいるが、主要科目として Latin 語の grammar を専ら教授していたためである。

さて近代では、French が Latin 語に代って、diplomacy 用語になった。しかし現代では、いろいろの意味で English が French に代って world auxiliary language となった。

§12 English language のこうした立場を説く前に、natural language がよいか、Esperanto のような artificial language の方がよいか考えてみよう。

人為的 language の理想は自然に発達してきた、主要な数カ国語の長所をとり入れて、科学的に組立てられていることである。そして同時に、どうしても避けられぬ欠点も入ってくる。この考えは別に新しいことではない。人為的 language は natural languages と違って

純粹に a priori の計画のもとに出発している。しかし、language がこんなものでよいと誰も弁護していない。languages は illogical に、それこそ長い月日を経て発達して現存するものである。

世界共通補助語の考えで作られたものに、Volapuk, Ido, Latino sine flexione, Novial などあるが、Esperanto は各国の universal language 賛成者に多く認容されているようであるので、一言しよう。

Esperanto は Latin 語は国際的で、最も中立的であるとして、Esperanto の vocabulary の中心的基礎としている。その grammar は極端なまでに簡単で、spelling は phonetic である。第一次 World War の後に League of Nations や、International Telegraphic Union, Union Internationale Radiophonie などの支持を得て、ある程度成功した。第二次 World War のあと、United Nations は Esperanto に対しては League of nations ほど熱心でなく、five official languages として、English, French, Chinese, Russian, Spanish をきめた。そのうち English と French を working languages とした。

Esperanto は1950年にパリで35回年次会議をひらいて、34の国から2,500人の代表の参加を得た。日常 Esperanto を使っている者は1,500,000人位で、最小の natural language の常用者数より少ない。著名な natural language の常用者数と比較すると問題にならぬほど少ない。

このように一番成功している、artificial language できえ、その誕生以来六十年以上を経ても、ほとんど受け入れられていない。

さらにこれまで Esperanto に反対する論旨は今尚誤っているとは思えぬ。全世界にわたる、さまざまな pronunciations は Esperanto の pronunciation の uniformity をさまたげている。Esperanto の grammatical system は Europe 諸語から見れば簡単かもしれないが、非 Europe 諸語、たとえば、Japanese にとっては依然とむつかしい。また英和、仏和、露和の間にも mistranslation があって、誤解が多くありうるが、Esperanto を和に、和を Esperanto に訳するとしても、mistranslation による誤解はさげがたいであろう。

このように、artificial universal language の計画はある程度成功しているが、その理想通りに全く完全なものとは言えない。

しからば、internatiano language としての English language はどうであろうか。近來 English は外交用語として、French に挑戦しているが、第二次 World War 以来完全に French にとって変った。世界中を旅行するにも、最も役立つ language は English である。

1950年印度は独立したが、English を依然保有している。印度にはいろいろな vernacular があって、English が通用するほど通用する venacular がないという事情が English を保有している理由かもしれない。

§ 13 Artificial language と natural language との中間の立場で、Basic English の企てがある。これは C. K. Ogden, *Basic English* (1930) である。I. A. Richards も加って出来たもので、English の表現を機械的に単化したもので、日本では土井光知氏等が賛成した。すべての人に認容されていないので、使用されていないのは Esperanto と同様である。しかし和文英訳の場合などには useful だと考えられるが、general acceptance が得られないのは language の usefulness にとって致命的である。

§ 14 Beach-la-mar とか、Sandalwood English とよばれる、西部大平洋一帯で使われている English, シナで、またある程度まで日本と Canada で使われている Pidgin English は English の corrupt form として著るしいが、かなり広範囲に話されている。Jespersen, *Language* (1922) を見ると、Pidgin とはシナで商業上との意味だそうである。このように 貿易用語が広く使われるようになったのは、Britain の影響力によるよりも、America の勢力が多く働いたからである。近代 English が World language に昇っていったのは、Pidgin English や Sandalwood English の中ばかりでなく、第一次 World War 以来、America が指導的になっていって general type の American English が Standard English を追越していったためである。

Mencken の *The American Language*, 1936を見ると、シナの mandarin がドイツ人や日本人の旅行者とだけでなく、同じシナ人とも English で話しているのを見たと告げている。シナは出身者が違うと、その Chinese vernaculars よりも English がよく通用するのであろう。

Renaissance 時代、Restoration 時代まで、English を話す人の数は少くとも他の Europe 語——German, French, Spanish, Italian——を話す人の数より少なかった。18世紀になっても多いとは言えなかった。しかし19世紀になると俄然多くなった。world language としてほかにも競争語があったが、English はいろいろな条件をそなえていた。なぜそうなったかについてはいろいろな見方があるが、England の Elizabeth 時代の指導力と America の政治力、経済力を考えねばならぬ。これは寧ろ language 自体の特長とともに、language 以外の諸力をも合わせ考える必要がある。新世界でも、有力な競争語、Dutch と French を駆逐した。18世紀後半と19世紀に English は地球上のあらゆる隅々まで征服によるか、植民によるか、交易によるかが地歩をしめた。かくして World language として徐々に確立していった。Krapp が推定しているように、English language を world language にしたのは、英国人と米国民が自らの language にねばり強く執着していたことが真の理由である。その事情を想像すると、English を話している人は外国語を習いたがらない。それで商売取引したいと欲する外国人はどうしても English を習わねばならぬ。南アメリカで商売しているドイツ人はイギリス人やアメリカ人にくらべて Spanish を進んで学習するそうだ。競争者がこんな態度のドイツ人では、Anglo-Saxon 族は商売に向いていないと言えよう。

19世紀後半までに、world language として確立した English はますます広まっていった。電報、ラジオ、映画、T. V. とその範囲は広まる。その English は British English であるより、American English の商標がついていた。ことに第二次 World War によって、以前に行ったことのない地域に多数のアメリカ人がばらまかれた。戦後飛行機旅行は国境を越えて、アメリカ商人を活動させた。かくて English language はますます文字通り World English になった。

English の language としての長所は何であろうか。語学上 English は international auxiliary speech としてよく合っているのだろうか。ほかの German, French, Spanish, Russian よりすぐれた language だろうか。

§ 15 最近の linguistics では、どれか一つの language が別の language よりすぐれていると言える、何等の証拠はないとしている。アイヌの文化を最もよく表現するには、アイヌ語は best language である。われわれが簡単に primitive language とよんでいるが、それは language が primitive でなく、それが表わしている文化が primitive であることであることを理解せねばならぬ。日本人がかって「butter, cheeze は日本にないもの」と訳していたのは、language として正しい。どんな language でも、それを使っている人が理解する程度に応じて、language で表現できるもので、いわゆる primitive language の構造は、いわゆる cultivated language にくらべて、同じように複雑であって、表現可能な程度については何等相違がない。だから各々の language について価値評価することは linguistics にとって無意味である。English が international auxiliary language として適しているか、どうかは、language として何も言えない。しかし、この問題には、人間の陥り易い危険がある。人間は emotions が強く、母国語に科学的な、objective な態度がとりにくい。母国語に対しては感情的な、深いひそやかな執着がありすぎる。English language について英米人が考えていることは subjective になり易いと見て、これを外国人である、言語学者 Otto Jespersen にきいてみよう。

∓The English language is a methodical, energetic, businesslike, and sober language. ∓と言っている。そして English language が world language になってゆくことに留意して、“It must be a source of gratification to mankind that the tongue spoken by two of the greatest powers of the world is so noble, so rich, so pliant, so expressive, and so interesting……”と言っている。また English の特質を要約して、“it seems to me positively and expressly *masculine*, …………… it is the language of a grown-up man and has very little childish or feminine about it.”

碩学 Jespersen のこのことばは、Modern English の特長をよくとらえていると思われる。ことに Present-day English はその businesslike simplicity では賞讃されている。German の inflection の多いこと、grammatical gender の natural sex と無関係であること、

French の verb 変化の多いことは、果して language にこれがどれほど必要か疑いたくなる。English の sound system も、syntax も vocabulary も簡明である。English を学習しようとする外国人はこれに入りやすい。これが world language とある、一つの理由とも考えられる。

しかし、English の simplicity はみせかけの simplicity で、あいまい obscenity を代償にしていると Sapir も言っている。English が与える simplicity の印象はたしかに入り易いが、French の細かい表現の出来る明解性とくらべて、とらえ難い obscenity をもっている。obscenity はむしろ English の特性とも言える。それ故に interpretation の作業に situational imagination が多分に働き、appreciation が subjective になり、個人、個人の特性を示すようになる。個人の経験が問題になる。ambiguity が欠点よりも、むしろ長所になるのではないか。

3 + 1 = 4 のような場合には誰でもが objective に均一的な interpretation しかない。structural linguistics の人々は objective な面のみを重んずるがために、subjective な meaning の問題を除外するようになる。structural linguistics はこのために phonology 面への貢献は偉大であるが、しかし language の研究は form と content 両面にわたるべきで、この派の人々がやっているように form にとどまっていたよいとは思えぬ。Chomsky などの考えているように、つまり meaning 面にも偉大な貢献が期待される。

English vocabulary はゲルマン語系とロマンス語系とごっちゃませに自由に compound されている。素人にはそのいずれか区別しがたい程——またその区別もほとんど必要のない程度で、いわゆる grammarless tongue とよばれるほどである。

Inflections については、Modern English は非常に単化していて、non-inflection といわれるほどである。O. E. にくらべて、word order は規則化されている。一方複雑な Phrase grouping とか、function words を使うようになった。之は O. E., M. E. にくらべて、同じように困難な問題である。

英米以外の外国人が English を学習する場合最大のつまずきとなるものは、なんといっても spelling である。Jespersen も言っているように、“pseudo-historical and anti-educational abomination.” である。外国人にとって troublesome だけでなく、米英人にも非教育的な悲劇である。言語学者 Jacob Grimm がいわゆる “whimsical, antiquated orthography” と嘆いたのは当然である。この厄介な orthography は今日まで spelling reform として試みられてきたが、その成果はほとんどあがっていない。

今後 English が World English として続くためには、world influence として、English を話している人々の発展と没落が問題となるであろう。

Reference books.

The Kenkyusha's Dictionary of English Philology.

Sanseido's Dictionary of English Grammar

Paul Roberts, Understanding English, 1958.

Simeon Pottes, Our Language. (Penguin Books), 1950.

H. L. Horwill, A Dictionary of Modern American Usage, 1935.

S. Robertson and Frederic Cassidy, The Development of Modern English, 1954.

C. K. Ogden, Basic English, 1930.

Otto Jespersen, Language, 1922.

H. L. Mencken, The American Language, 1936 四版

G. P. Krapp, The English Language in America,

Otto Jespersen, Growth and Structure, of the English Language, 1935.

Doniel Jones, An outline of English Phouetics, 1932.

Encyclopaedia Britanica 中の "Univesal language".